

私のシベリア物語り

アンゲレン・カラカンダ収容所(炭鉱大隊)

静岡県 山梨 一夫

東京ダモイに騙されて

昭和二十(一九四五)年八月八日夜半、突然の非常呼集「今爆撃を受けている」「電気を点けるな」「完全武装して整列」新京(長春)関東憲兵隊司令部四班に起こった事態でした。

九日から班長、長島大尉は本部に詰めつきり、私達は班の秘密書類の整理に躍起となり、本部の命令を待った。十一日召集兵の博士、技師、技手は召集解除となり、女子軍属も即日帰宅となり、十二日になって、八月に新編成の第一特別警備隊は奉天(瀋陽)の本部に向かった。夕立の雨の中、貨車の中で天皇陛下の玉音放送があったらしい。

一億総玉碎命令かも知れない。関東軍に応援の北支軍は北上し、私達は南下する。そんな繁雑の中、

十五日夜中、初めて終戦を知りました。

八月二十日に武装解除を受け、九月二十日に「スコーラ、東京ダモイ」まんまと騙されて貨車に乗り込み二カ月。着いた所は雪の原、回りの高い雪山に囲まれた草原でした。

どこへ連れて来られたのか

そこには蒙古人のような髭の住民がロバに乗って、日干し煉瓦の小屋に住み生活しておりました。半年ぐらいして、中央アジアのシルクロードのウズベキスタン、海拔二千メートルの天山山脈の南端、アンゲレン村と分かりました。『暗愚連』確かに俺達、ドアホーだったなあ、住む所まで馬鹿にされた感じでした。

ここにはロスケの監獄、男と女の二つ、日本人の収容所が三つも有り、そこへ私達と後続の人達で八千人の抑留者の村となり、地の果ての開拓地でした。

この高原の草原を皮剥けば石炭の露天掘り、山は横掘りの炭鉱、縦坑もあり、これからこの草

原に炭鉱住宅を建て、道路を作り、石炭を掘り、発電所の建設の仕事が昼夜三交代で、畜生にも劣る過酷の厳寒、飢餓、ノルマに攻められ日本人抑留者の過酷な生活を強いられるのです。

狐猿のソ連兵

奉天に入ってきたソ連軍、汚れた軍服、あから顔に産毛、獐猛野蠻「チャスイ、ダワイ」「カレンドッシ、ダワイ」日本人を見掛ければ、マンドリン銃向けて強奪、万年筆は勲章のように何本も胸に、腕時計は両腕にずらり、こんな野生の猿に負けたのか、情けないけど万年筆を差出した。

略奪のソ連

東京ダモイと貨車に乗せられ北に向かう私達の見たものは、日本人工場の機械、部品、ガラス窓、針金、ブリキ板、果ては寝具ふとんまで積込んだ貨車を見た。日本軍の兵器の戦利品なら仕方無いが、これまで生活用品に欠乏し耐えて勝利したのか、なかば感心して泥棒貨車をいく度も悔し涙で見送った。

ノルマの国ソ連

ノルマって何だ、俺のように特技のない者は、道路工事の側溝掘りしかできなかった。夕方五時になるとロスケの監督「ビツクリ」が物差しで仕事量を計りに来る、初めて知る共産国のノルマで、黒パンの大きさに響いてくる。日本人抑留者は帰国するまで、この黒パンに釣られた。腰に拳銃をぶら下げた総監督の「オオカミ」と呼ばれた冷酷な奴、その下にビツクリと言う人間の顔はどうしようもない奴、情け容赦なく動物扱いする、薄情なロスケ、奴隷とはこのことか。

計算能力のないソ連人

ソ連人は九九を知らない。先ず朝作業に出かける人員の計算、五列に並ばせる。二回、三回と繰り返す。作業場、帰りの収容所の門、何回も何回も。セメントの打ち込み、四角い立法メートルならまずまず、トンネルの蒲鉾型など出来なかった。彼らは夕方のノルマ計算が大変のようでした。復員後、モスクワ、サンクトペテルブルグへ度々旅

行した。外貨ショップではなかなか釣り銭が戻ってこない。しびれを切らして手助けすると「プラーミンド」お前の言う通りとなる。

収容所の青空教室

抑留生活間もなく「日本新聞」が抑留者向けに発刊され、シベリア民主運動のバイブルとなり、反ファシストの打倒、階級闘争とか、マルクス、レーニン主義とか、私達は政治に疎かったので、軍服の階級章でも外すのかなと思つた。ソ連政治部の後押しで活動分子が育てられ、なびかない者は反動分子の責め苦にあつた。

憲兵はみんな反動分子のレッテルを貼られた。

なびかない憲兵仲間の中に満州建国大学の法学博士、尾上正男先生が若手憲兵の仲間入りしてくれた。毎日作業の終わった後、収容所の片隅の青草の上で先生の話の聞いたり討論したりした。いつの間にか「日本青年同志会」となつた。やがて反動分子と目され、表面解散した。帰国後も交流は続き、先生は神戸学院総長になられたが、神戸、

京都、静岡などで苦労話をしました。

対ソ誓約者

私達憲兵は、ソ連内部人民委員部から皆二回以上は取調べがありました。抑留者は労働だけでなく、共産主義革命のための洗脳教育を強いられました。そしてその中から有用な情報活動の協力者を作つた。私達収容所にもイワノフという政治部の将校がいた。私達四班と一緒に無電探査隊も毎日のように取り調べがあり、いつの間にか、いづこともなく消えていった。勤務先、仕事内容、下調べは出来上がっていたと言う。提供したのは上司の某中尉、早期帰国を条件に部下の仕事を提供して帰国した。復員して、確認した。静岡公安局のリストには彼らの帰国後の行動はチェックされていた。東京タワー付近の喫茶店、狸穴のソ連大使館員と密会するソ連抑留者が多かつたようです。

日ソ中立条約の破棄

昭和二十年四月、ソ連は日ソ中立条約の破棄を通告してきました。締結国の一方が破棄しても一

年は有効でした。

ドイツの降伏

昭和二十年五月四日ヒットラーが自殺しました。

昭和二十年五月十一日ドイツが無条件降伏しました。

すがって、泣いて助けを求める日本

なおも軍部は、元総理大臣広田弘毅さんを対ソ交渉者として、広田、マリク会談が行われたが進展はなく終わりました。

昭和二十年七月十二日、日本政府は昭和天皇の裁可を得て、元総理大臣近衛文麿さんを「天皇親書」を持って特使として駐ソ佐藤大使にソ連側に十三回も取次の依頼をしたが取り合わなかった。スターリンとモロトフは既に、ポツダム会談に向かっています。

ポツダム会談

昭和二十年七月十七日から八月二日まで、ベルリン郊外のポツダムで、米国はルーズベルトが死んでトルーマン、英国はチャーチルが落選してア

トリーに代り、スターリンは古株で、会議は終始優越感を示す振る舞いだったと言われます。

米国のトルーマンは、既に原爆実験の成功で、単独で日本を降伏させる確信をもっておりました。もはや、ソ連の手を借りなくても、スターリンの出番の必要はなかった。それを知らぬスターリンは、日本がソ連に必死になつて和平仲介を頼みに来ていることを両首脳に知らせます。米、英はなら相談も、知らせることも無く、中国を加え『ポツダム宣言』を発表してしまいました。

スターリンは驚愕、激怒した

ソ連外相モロトフは、米国国務長官バーズに怒りをぶちまけた、バーズはつれなかった。あなたの国はまだ日本と中立条約を結んでいます。あなたの国を困惑させたくなかったのです。アメリカの原爆投下により、日本が降伏してしまつたら、日本から獲物を獲る理由が無くなつてしまう。スターリンは苛立ちました。米、英に對日参戦の「見せかけ」を呼び掛けます。

昭和二十年八月六日アメリカは広島に原爆投下

なんとか日本と戦争をと、対日作戦に飽くなき執念を持つスターリンは、ポツダム宣言を黙殺、スターリンは独断専攻早く、野望を実現するためには「中立条約」を破り、新たな戦争を起こすしかないと決意。

ソ連が日本に宣戦布告、同盟国に対する義務昭和二十年八月八日午後十一時三十分、スターリンはソ連極東に総攻撃を命令、ソ連軍は満州、樺太、千島に攻め込んできました。明けて九日、アメリカは長崎にも原爆の投下がありました。

日本は無条件降伏しました

昭和二十年八月十五日に天皇の詔勅により軍事行動停止、降伏しました。スターリンはなおも極東司令官に八月十五日の通告は無条件降伏の一般声明に過ぎない、日本への攻撃は継続すべしと命令した。スターリンは北海道の「留萌から釧路へ線引きして、両市も含めて北半分」を占領する秘

密計画をもっていました。あわよくば北海道全島を占領して、占領後、社会主義国の地位を与え、ソ連に忠誠を誓う地位の高い日本人捕虜を指導者とすする計画も持っていたとも言われます。東西ドイツの分割、南北朝鮮分断の悲劇を味あわなくて良かったと思います。

八月二十日スターリンは北海道上陸作戦を命令します。極東軍司令官ワシレフスキーは直ちに歩兵八七部隊に作戦指令を出しました。

上陸作戦を控えよ

八月二十二日、突然モスクワより指令がありました。北海道上陸は控えよ。スターリンの命令でした。それはスターリンの要求に対して、トルーマンは、九州、四国、日本列島、北海道はマッカーサー將軍が連合軍の総司令官である。北海道はアメリカ軍の管理下にある。トルーマンは終始一貫してスターリンの要求を拒否した。スターリンの北海道占領は実現しなかった。

シベリア抑留に転換

八月二十三日、運命の転換がありました。狡猾、抜け目ないスターリンの次の手は「即」「日本人捕虜輸送に関する実施要項」の虎の巻を極東司令官ワレシフスキーに命令した。この実施要項はヤルタ会談（一九四五年二月）のころから作られておりました。捕虜五十万人の配置先は、ハバロフスク地区六万五千人。その内訳は石炭掘り二万人、アムール鉄道二万人、森林伐採一万五千人、石油掘り五千人、アムール鉄鋼千五百人、カザフ五万人、イルクーツク五万人、チチンスク四万人、クラスノヤルスク三万人、ウズベック二万人、モンゴル一万六千人、アルタイ一万四千人等の人員配置、戦利品の馬四千頭の配分先まで。その他満州の重工業の機械、銀行の日本紙幣、満州紙幣、朝鮮紙幣、預かり貴金属類まで接收計画ができていた。

誰が、シベリア抑留を決めた

日本が降伏したころには、ドイツ捕虜三百六十六万人、ハンガリー、フィンランド、イタリヤの捕

虜七十万人、それに日本人捕虜六十万人、独ソ戦で捕虜となったソ連軍人、彼らは祖国の裏切り者として牢獄に入れられた。併せて五百万人の捕虜労働舎が極寒のシベリアで働き、ソ連は無報酬の労働国家を形成していました。シベリア抑留はジャリコーボの日ソ停戦協定で、近衛特使持参の親書に労働提供などと聞きますが、これだけの労働力の動員の重大決定はスターリン以外、不可能と思います。国際法を無視するスターリン、情け容赦ない傍若無人、冷酷、狡猾、残忍、人々の運命を死に追いやる顔に見えました。国際法なんてお構いなし、野蛮国の戦勝国が捕虜を奴隷として使っただけ。炭鉱で一緒に働いた老人達がスターリンのことを言うと、「ホイ（おちんちん）スターリン」昔の帝政時代のころがよっぽど良かった。陰でスターリンの悪口を言った。